

引用のしかた

レポートを書く上で、自分の考えの根拠を示すために、他人の意見や理論やデータなどを借りて書くことが「引用」です。つまり自分の考えの証拠となるのが「引用」なので、レポートのかなりの部分を占めることになります。3分の2以上を引用から（つまり自分が調べた内容）で埋めるように指示される場合もあります。

しかし、その引用部分を自分の文章と同じように書いてしまえば、どこが自分独自の考え方なのか、区別がつかなくなります。自分独自の考えや文章を明確にし、それに対して責任をもつという意味でも、他人の記事や著作物から借りてきた文章やデータとは区別されるように書くことが必要です。もし、他人の考えや発見を自分のことのように書いてしまうと、それは「剽窃」や「盗作」といって学問の世界では重い罪になります。

そこで、どこからどこまでが何の引用なのか、その情報が誰でも確かめられるように、最後やページ下の「引用文献リスト」と照らし合わせるように、表記や表現を工夫します。（レポートライティング 14「参考文献のあげかた」参照）。

各研究分野や雑誌、そのスタイルは異なる場合が多いので、引用の決まり事については確かめてから書いてください。ここでは最後に文献リストをあげる場合の、文中に注番号をつける場合と、著者名と出版年を入れる場合の3種類を簡単に説明します。詳細については、次のウェブ・サイトを参照してください。

SITS 科学技術情報流通技術: <http://sist-jst.jp/index.html>

日本心理学会『投稿の手引き』: <http://www.psych.or.jp/publication/inst.html>

【文中での「引用」の仕方・書き方の例】

1. 引用した文章の後に番号をふって文献リストと照合させる方法（短めのレポート、卒論の場合など）

引用箇所のすぐあとに注番号をふるやり方です。10枚程度の通常のレポートの場合は、この方法が簡単です。読み手には、番号が振ってあるところまでが引用であることがわかります。引用文献リストは、注番号順に並びます。雑誌論文では「文字飾り」の「上付き」機能を使って上に小さく番号をつけることが一般的です。

注番号のふりかたの例

と述べている(3)。 と述べている。(※3) と述べている。⁽²⁾ と述べている⁴⁾。 と述べている。^{※5}

(1) 要約して引用する場合

引用する部分を自分なりの言葉でまとめて（要約して）書く場合、どの範囲までがその本に書いてあったかが分かるように自分の文と区別した表現で書きます。文の最後の句点の前に番号を入れます

- 例) ・丸山渉は、・・・・・・・・と述べている(2)。
 ・中川努は『公共事業の失敗』のなかで・・・・・・・・であることを指摘している(2)。
 ・岡本・山下は、1950年に〇〇が・・・・・・・・であることを発見した(2)。
 ・本書では、このことを・・・・・・・・と説明している(2)。
 ・『修道大学の歴史』では、・・・・・・・・ととりあげられている(2)。

(2) 1、2行以内の原文（もとの文のまま）を短く引用する場合

引用箇所を「 」でくくりその後に注番号を入れます。

- 例) ・しかしながら一方では、「〇〇が・・・・・・・・である」(2)と主張する学者もいる。
 ・梶山によるとは、〇〇は「・・・・・・・・」(2)である。
 ・著者は、この言葉を「・・・・・・・・」(2)と定義している。

(3) 長めの原文引用の場合

原文の引用が3行以上になるときは、行を変えて行頭2～4字文下げ、さらに前後一行空けて独立した段落として書きます。

例) 丸山は、最初の著作である『古代東北社会の風俗』で以下のように述べている。

ムラ社会が形成されるごく初期の段階では、……………。(中略)例えば……………
……………という事実も確認されている。(1)

2. 著者名と年号を文中に入れて、文献リストと照合させる方法 (投稿論文、学位論文など。最近の書き方)

本文中に引用番号をふらずに著者名と年号を入れる方法です。文献リストは著者のアルファベット順に並べます。書き手側としてはあとから引用を追加しても番号が全部ずれて、修正しなければいけない、という手間がいらず便利です。読み手にも誰のいつの論文か、最小限の情報が本文を読みながらわかるの

(2) 1、2行以内の原文(もとの文のまま)を短く引用する場合

引用箇所を「」でくくる。引用文のすぐ後に()書きで執筆者の名前と出版年、引用ページを入れる。

例) しかしながら一方では、「〇〇が……………である」(丸山 1968, p.68)。

丸山(1998)によると、〇〇は「……………である」(p.68)。

(3) 長めの原文引用の場合

原文の引用が3行以上になるときは、行を変えて行頭2～4字文下げ、さらに前後一行空けて独立した段落として書く。最後に()書きで執筆者の名前と出版年、引用ページを入れる。

例) 丸山は、最初の著作である『古代東北社会の風俗』で以下のように述べている。

ムラ社会が形成されるごく初期の段階では、……………。(中略)例えば……………
……………という事実も確認されている。(丸山 1968, p.68)

(4) その他の決まりごと

- ・3人以上の著作者の場合、2回目以降は(丸山・他 1986, p98)でも可
- ・すぐ後で同じ著作を引用する場合は(丸山・前掲書)でOK。
- ・一部を省略するときは(中略)、傍線や傍点を入れるときは(傍線は筆者)を入れる。

3. 引用部分と自分の意見の書き分け方の例

- ・…は…で、…という意見を展開している(3)。それに対して筆者(私)は、……………
- ・～では～という結論となっている(3)。確かに～の点については～ので、妥当な判断といえる。
- ・～は～について「……………」と述べている(3)。それについては、……………とも考えられる。
- ・「……………」(3)。これを～という観点から整理すると3つの方向性が導かれる。1つは……………
- ・～は～と説明している(3)。したがって……………のはずだ。
- ・「……………」(3)。つまり、……………ということになる。